

『ターンオブフェイト』

川瀬 七貴

8535字

あらすじ

親友である亮とバンドを組み、高校卒業後は上京を夢見ている俺。ある日、クラスメイトの超真面目女子、水沢に公園の清掃ボランティアに誘われる。断りきれなかった俺は渋々参加するが、そこには思いがけない人との縁があり……。

「じゃあ、前にも話した通り、明日は、公園の清掃ボランティアをやるから。参加出来る人は、後で先生の所に来てくれ」

帰り際に何の話かと思えば、何で夏休み初日からボランティアなんかやらなくちゃいけないんだよ。

(そんなの行く奴いるのかよ。どんだけ性善説で生きているだよ、うちの担任は)

「おーい、内田、帰ろうぜ」

親友の亮も全くもって俺と同意見らしい。先程の担任の話など、まるで無かったかの様にすっかり帰り支度を済ませていた。

「ん、帰ろ、帰ろ」

他のクラスメイト達もぞろぞろと帰っていくなか、皆の様子を戸惑った表情で見つめている女子がいた。クラス一、いや全日本真面目選手権なんてものがあつたら優勝できそうな、体内の98%が真面目で構築されている、水沢 愛理だ。

(あー、もしかして、あいつ、皆がボランティアに参加してくれるとか信じていたんだな。ほんと、水沢らしいわ)

若干哀れみの目で彼女を見つめていると、対極した磁石がバチッとくっつく様に目が合ってしまった。

(しまった！)

「あ、内田くん」

獲物である俺を見つけた彼女は、少しはにかみながら、嬉しそうにこちらへ駆け寄って来る。

(あー、逃げそびれたよ)

「あ、あの、先生が言っていた、ボランティア、一緒に参加しない？」

(うわ～きたよ～。女子からのお誘いは嬉しいけど、ボランティアはな～)

「え、あー、えっと、明日は亮とバンドの練習があるからさ、な、亮？」

同意を求め振り向くと、いつの間にかヤツの姿がない。

「は?!あれ!?!」

見ると、亮はさっさと廊下に出ており、俺に一度手を合わせると、猛スピードで走り去ってしまった。

(あいつ～～!!!裏切り者めー!)

「そっか。そうだよな、内田くん、忙しいもんね。バンド、頑張っているもんね」

しゅんと大袈裟な程に眉を垂らす。こんな風に捨て犬の様な上目遣いで、しかも消えてしまいそうな声で呟かれたら、幾ら何でも断れ無いただろう。

「いや・・・練習は夕方からだから・・・それまでなら良いけど」

「本当?!」

たったこれだけの事で、空から宝石でも振ってきたかの様に、瞳を輝かせはしゃぐ彼女。どうも俺は、こういう純粋なる女子に弱いらしい。

「ああ、良いよ」

(…とは言え、はあ～せっかくの休みが、公園の清掃で潰れるのか～、最悪だ)

本日の外気温32度。さあ、この夏を全開で楽しめと言わんばかりの雲一つ無い晴天のなか、TシャツGパンに軍手姿の俺は公園の前で立ち尽くしていた。

「あちい…」

眩暈を起こしそうになり、眼球がオートでぐるりと一周回る。すると、視界の端に見慣れた女子の姿が映り込んだ。

「内田くーん」

やつは暑さを感知する機能がぶっ壊れているのか。この焼ける程に日差しが射し込むなか、あろう事か満面の笑みでこちらに手を振っていた。

(あいつ、人間じゃねー……………だがしかし、私服姿の水沢は新鮮で悪くないな)

彼女も俺と同じくTシャツにGパン姿だったのだが、普段大人しいイメージの水沢がこういう格好をするのは意外性があり、思わずドキッとしてしまう。

(これが所謂ギャップ萌えてやつか?! お、夏恋はじまっちゃうか?!)

「なんか…まるで俺達フェスに行くみたいだな」

「え? フェス??」

小柄な彼女は少し眩しそうに目を細め、こちらを見上げる。

(やばっ、このシチュエーション、二人の服装!! まるでデートでフェスに来たみたいな気分になってきたぞ!)

先程までの憂鬱な気分はどこへやら。何の根拠もなく、妄想のみで徐々に俺のテンションが上がっていく。

(亮としか一緒に行ったことないからな。彼女を連れてフェスとか最高じゃねーか! お揃いのバンドTシャツ着てさ。ラスト感動の余り涙を流す彼女の肩を抱き寄せて…ああん?! もしかして最高なんじゃね?! 今日は最高な一日になっちゃうんじゃないか?! 二人の思い出つくっちゃうか?!)

「おお、お疲れ、お疲れ」

せっかくの良い雰囲気をおち壊すしゃがれた声が、ナイスなタイミングで二人の間に割り入ってきた。担任さまの登場だ。

「なんだ、本当にお前ら二人だけか」

(ちっ、こいつの存在を忘れていた…。はいはい、今日はフェスなんかじゃなくて、清掃ですよ、清掃。これが現実ってやつね)

「まあ仕方ない。後から市の職員さんと他のボランティアの人達も来るから。それまで、はい、これ」手渡されたのは雑巾とクリーナーだった。

「へ? 草むしりとかじゃなくて? 俺、てっきりそういうのだと思って、軍手してきちゃった」

「お前、昨日の話聞いていなかっただろ。ゴミ拾い、草むしりは小中学生のボランティアが担当。お

前達高校生は、ベンチとトイレの清掃な」

「え〜トイレ〜、マジかよお〜」

一気にやる意欲がそがれた俺は、この暑さと相俟って再び眩暈を覚えた。

「ごめん、内田くん。私が昨日ちゃんと内容を言わなかったから」

「ん？水沢が謝る事はないよ。単純に先生の話聞いていなかった俺が悪いただけだろ」

「そうそう、内田、お前が悪い」

「ちいっ」

先生に話題を振ったつもりは無いのに、勝手に同調されて若干イラッとする。

「とりあえず、まずはあのベンチから磨いていこっか」

彼女が指差した先には、木陰の下にある2人掛けベンチがあった。

(おお、日陰じゃん、ラッキー)

「よし、来たからには徹底的に磨きますか」

「うん、ピッカピカにしようね」

お前の笑顔がまさにピッカピカだよと言いたくなるのを堪え、クリーナーを握りしめると、返事もせずに一人ベンチへと向かう。

「あ、内田くん待って〜」

(ちくしょう！夏休みの魔物め！もう頭の中が恋愛モードじゃないか！！)

そして、こんちくしょうと言わんばかりに、スプレー噴射で洗剤をベンチに向けて吹きかけようとしたまさにその瞬間。

「内田くん駄目！！」

突然後ろから大きな声を上げられ、反射的に手が引込んでしまい、その反動で股間にクリーナーを吹き付けてしまった。

「ふんぎゃにやろっつ」

思わず変な声が漏れる。

「大丈夫？！ごめんね、急に大きな声を出して、大丈夫？！」

「い、いや、大丈夫。ちょっとビックリしただけだよ。な、なんだったかな」

びしょ濡れになったズボンの前を、必死でクリーナーのボトルで隠す。

(まさかの漏らしたみたいになっているじゃねーか！)

「あのね、このベンチ木製でしょ。木は直接洗剤を吹きかけちゃ駄目なの。雑巾に染み込ませてから、優しく拭いてあげて」

「へ、へえ、水沢詳しいな」

「うちの家具、木製のものが多くて。掃除の時に同じ洗剤を使っているの」

「家の掃除とかしているんだ、すごいな」

俺の言葉に彼女の頬がほのかに赤く染まる。

「そんな・・・うちは両親が忙しいから。それに、家が綺麗になっていくの楽しいし」

「へえ〜」

(うわやっべ。俺、家の掃除どころか、自分の部屋の掃除もしてねーや)

「そういえばさ、ここのベンチ、いつも近所のおじいちゃんが座っているよね」

「え？そうなの？」

公園なんて小学生の時以来利用する事もすっかり無くなり、普段ここの前を通っているにも関わらず気にした事なんて全くなかった。

「うん、この間、塾の帰りに少しお話してね。以前は奥さんの一緒にここまでお散歩していたんだって。でも、奥さんが亡くなっちゃったらしいんだけど、ここに来ると二人で並んで座っている気分になるんだって」

「そっか、大事な場所なんだな」

「うん、だから今日清掃がここって聞いて嬉しくて」

まるで自分の事の様に眩しい笑顔を覗かせる。彼女の笑顔を見ていると、何だかこっちまで何だか嬉しくなってきた。

「そっか、じゃあキレイにしてあげなきゃな」

「うん！」

しかし、腕まくりをし、やる気を出した途端、どうも股間の辺りがムズムズと痒くなってきた。

(あれ、やべ・・・もしかして、さっき洗剤がかかったからか？どうしよう、俺の大事な部分が腫れたりしたら！これは水沢とデートどころではない！人生と子孫繁栄の危機がかかってくるぞ！！アンチ少子化日本の俺の夢が！！)

「ちょ、水沢悪いんだけどさ・・・俺、トイレに行ってくるから、わり、これ預かっていてくれ」

「あ、う、うん」

彼女に掃除道具を預け、トイレへとダッシュする。

(どうか、助かってくれ、俺の大切な息子よ！！！)

男子トイレの洗面台前へ滑り込むと、さっそくズボンの中を覗き込んだ。

(ほっ、良かった。特殊形態に進化しているかと思ったが・・・いつも通りのコンパクトさだな)

それはそれで何か悲しいが、とりあえず、一安心し、ほっと胸を撫で下ろす。

「に、しても」

目の前の鏡、流し台に、蛇口、残念ながらどれも使いたくなる雰囲気ではなかった。

「・・・これは、さすがによろしくないなあ」

「お、内田、トイレ掃除始めるのか」

まさに待ち構えていたかの様に、絶妙なタイミングで担任が入ってくる。

(くそ～狙って来ただろ。何が何でも俺にここの掃除をさせる気だな)

「こんにちは～」

一緒に、掃除道具を持ち、区名が印字されたジャンパーを着た男性も入ってくる。

「今日は、参加頂きありがとうございます。いや、若い方にも関心を持ってもらえて嬉しいです」

職員の方が頭を下げるので、慌てて俺も頭を下げる。

「あ、いえ、どもども」

「せっかくこんな良い場所に公園があるので、皆さんにもっと利用して頂きたくて。こうやって定期的に清掃活動をする事で、この場所に愛着を持って頂けたら、と今回の清掃を企画させて頂きました。そうしたら、学生さんからご年配の方まで幅広い層の方々に今日は参加して頂けて。嬉しいですね。いや実は今、休日にはイベントなどを催す計画も立てていまして。マルシェなどを検討しているんですよ。他にも何か活用出来ないか、みんなで案を出し合っている所です」

「それは面白そうですね」

(イベントか・・・あれ、もしかして演奏とかもさせて貰えないかな)

俺と親友の亮は、今、二人でバンドを組んでいる。普段は亮の家で練習をし、時々先輩がライブハウスでライブをやる際呼んで貰って前座で演奏をしていた。だが、俺も亮もここで終わる気は全くなく、もっと多くの人に聴いてもらいたいし、高校卒業後は上京する事も既に決めていた。

「あ、あの。俺、バンドやっているんですけど。あ、バンドって言っても、俺がギターで、友達がドラムやっていて、二人組なんですけど」

「へえ、ホワイト・ストライプスみたいですね。あれはドラムがメグという女性ですが」

「え？ホワイト・ストライプスを知っているんですか？！洋ロックとか聴くんですか？」

失礼ながら、眼鏡に黒髪のこんな真面目そうな男性が聴きそうにもないロックバンドだったので、あからさまに驚いてしまった。

「僕、こうみえて音楽好きなんですよ。ただ、普段聴くのは邦楽が殆どですけどね。あ、でも君たち世代の若い音楽はよく知らないの。聴いてみたいですね、若い子の音楽」

「俺達は若い感じのノリが良いものでも、激しいロックでも無いんですけどね。大人しめな曲調が多いです。俺も友達も、静かでキレイな音が好きで。カーペンターズとか」

「カーペンターズって、僕でも世代じゃないのに、凄いですね。なるほど、音楽って年代を越えて交流出来るツールの一つかもしれない・・・うん、良いですね。静かな曲調だったら、幅広い世代にも受けそうだし、ぜひ検討してみます」

「うわ、マジですか！お願いします！！」

「良かったな、内田。じゃあ、トイレ清掃ますます頑張らなきゃな」

担任が両手に持った掃除道具を、ほれほれと渡してくる。

「もちろんやるよ、やりますよ」

じとりとした視線を残しつつも、受け取ったスプレーを水垢だらけの鏡や蛇口に吹きかけた。

「自分のコンサート会場だと思ったらやる気でした？」

「でますよ、そりゃ。そういえばライブとかも行くんですか・・・えっと」

「三上です」

「ああ、ありがとうございます、三上さん。あ、俺、内田って言います」

「内田君ね。いや、内田君を見ていると高校時代を思い出しますね。僕、学生時代はフェスとかも行っていたんですよ。今でも好きなアーティストがたまにライブをやってくれるので、その時は東京や大阪まで行きますし」

「遠征するんですか？凄いな！三上さんは誰が好きなんですか？」

「内田君は知らないだろうけど、学生時代はミッシェルとか・・・もう解散しちゃいましたけど。もうね、それこそ青春そのものでしたよ」

三上さんはデッキブラシで床を磨きながら、生き生きとした声で話す。

「本当に音楽が好きなんですね。なんか、俺達が音楽の話をしててもクラスで浮いちゃうから、こういう話が出るのすげえ嬉しいです」

「音楽の話をしなくても内田は浮いているけどな」

ケケケと担任が嫌な笑いを浮かべてくる。

「ですよね・・・」

「いや、きっとミュージシャンになる様な人は浮いているくらいでちょうど良いんですよ。実は僕の同級生がバンドをやっている。結構売れているみたいで。やっぱり彼も学生時代は友達も居なくて、かなり浮いた存在でしたよ。今ではネットや雑誌であいつ見ていると羨ましいなあ、なんて思っちゃいます」

「え？誰です！？バンドの名前教えて下さいよ！」

俺達が音楽話で盛り上がっている最中、気付けば鏡も流し台も見違える程に汚れがクリーナーによって流し落とされていた。

「あ、内田くん、先生、お疲れさまー」

清掃を終えトイレから出ると、反対側にある女子トイレから水沢が出てきた。

「ちょうど、こっちも終わった所だぞ水沢」

「あ、ごめん水沢！ベンチの掃除すっかり忘れていた」

「ううん、あの後、長野さん。あ、あのベンチにいつも来るって話をしていたおじいちゃん。長野さんが来てくれて、一緒にお掃除したからすぐに終わったの。そんな事より内田くん、大丈夫？」

忘れていた事を咎める所か、俺の心配をしてくれる水沢。どこまでいっても生真面目というか、なんというか。

(こういう女子を大和撫子って言うんだな。水沢みたいな女子と付き合ったら良いかもな)

またも俺の中で勝手な妄想が暴走しつつあった。

「内田くん、長野さんと知り合いなんだ。さすが、抜け目ないね」

話を聞いていた三上さんがにやけながら突いてくるが、俺には何の事だか全く分からない。

「いや、長野さんっていうおじいちゃんの話は、今日水沢から初めて聞いただけですけど」

「なんだ、そうなんだ。てっきり、長野さんが大手レコード会社に勤めていた事をリサーチして知り合いになったのかと」

「ええええ！？マジっすか！！」

「え～私も知りませんでした」

水沢も指先で唇を押さえながら、目を大きく見開く。

「知らなかったの？あ、ほら、長野さんあっちにいるから話しておいでよ。それにしても良かったね、今日のボランティアに参加して。これも何かのご縁だね」

「ですね、間違いないです。なんか、三上さんみたいに音楽の話が出来る人がいるなんて、・・・しかもあのおじいちゃんも・・・人との縁って分からないもんですね」

人と人の繋がりとは不思議なもので。普段気にも留めていなかった公園が、まさかネットの世界よりももっとダイレクトに自分に必要なものが沢山あるとは思いませんでした。

「そうだぞ、内田。ネットばかりじゃなくて、こういう昔ながらの地域との関わりというものを大事にしなきゃ駄目だってオレがいつも言っているだろ」

ここで何故か担任がドヤ顔を見せてくる。

「はいはい、先生様の言う通りですよ」

「ははは。そんな風に今の高校生が思ってくれるのは嬉しいですね。区役所の職員として、こんなに嬉しい事は無いです。実は僕、大学生の頃、バックパッカーをしていたんですよ」

「すごい、三上さんってめっちゃアクティブですね」

「うん、でも結局日本に帰ってくると、ああ落ち着くなって思うんです。日本独特の美にやはり感動するんです」

「日本独特の美？」

水沢と目を合わせ、お互いに首を傾げる。

「そう、日本ってね、キレイな所なんです。まず街がね、すごくキレイです。地下鉄とか落書きだらけじゃないし、公園も今日みたいにボランティア活動のお陰でキレイになっていますし。あと、人の心がキレイ。お店や電車の前で、ぐちゃぐちゃにならずにキレイにみんな一列に並ぶでしょ。そうそう、この間、スーパーでね、僕の前に並んでいたご夫人が、パンとジュースしか僕の籠に入っていない事に気付いて、先にどうぞって言ってくれたんですよ。ご夫人だっけずっと並んでいたのに」

「素敵ですね、そういう話、私感動しちゃいます」

ここまでの話で、既に水沢の瞳は潤んで今にも涙が零れ落ちそうになっていた。

「きっと長野さんと話したら、内田君は号泣する様な話が聞けるかもしれませんね」

「俺、ちょっと長野さんの所に行ってきます」

「はい、今日はありがとうございました。またボランティアに参加してね、内田君」

「こちらこそ！ありがとうございました」

三上さんにお礼を言うと、水沢と共にベンチに座る長野さんのもとへと走って行った。

「いやいやいや、それ、絶対作っていますよね、内田さん」

向かいのソファーに腰掛け、カウボーイハットを被った編集者が大袈裟に手を横に振る。さすが、東京のお洒落なカフェでは、彼の様な格好でも決して浮きはしない。

(これが地元の喫茶店だったら、ちょっとした不審者だぜ。純喫茶『なぎさ』では絶対に許されない格好だな)

「いや、これ、完全実話だから、な、亮」

隣に座る亮に救いを求めるが、ヤツは相変わらずのマイペースで一心不乱にチョコレートケーキを食っていた。

「僕はそのボランティアに参加してねーからな。もう何万回も聞かされているけど、話盛っているかもしんねーしな」

「おい、さっそく裏切るのか!？」

「裏切るもなにも…まあ、でも、長野さんが大手レコード会社勤務だったのは本当ッスよ」

「へえ〜、〇〇レコードの長野さんね。僕は知らないけど、会社に戻れば誰かは絶対知っていると思いますよ。それにしても、ちょっとその話はやり過ぎでしょ。それじゃ信者レベルのファンでもひきますよ」

彼は音楽雑誌社の編集部の人で、よく俺達のバンドのインタビューを担当してくれていた。今日は、運命的な出来事をテーマに何か話して欲しいという要望だったので高校時代の話をしたのだが、どうやら全く信じてくれない。

「本当の話なのに、ひくも何もないだろ。ってか、バンドマンなのに超甘党の亮の方がひくだろ」

チョコケーキを平らげた後、パンケーキを追加注文する亮へあからさまに嫌そうな顔をしてやる。

「僕、ファンの子達には可愛いポジションで定着しているから」

「ちっ、お前はビジュアルが良いからな!」

「まあまあ、二人とも。それにしても、初フェス参戦おめでとうございます。デビュー1年で大型フェスに参加出来るなんて、まあお二人の実力なら当然だろうけど」

「…どうも」

照れ隠しに、目の前にあるホットコーヒーに口をつける。本当はミルクと砂糖を入れたいのだが、俺はバンドマンらしくブラックを貫いていた。

(すんげえ苦い、すんげえ苦いよ店員さん。これアメリカンじゃないよね? エスプレッソと間違えてね?)

「それにさ、来月出る新曲。聴いたけど、すごく良いですね。二人の真骨頂である音の美しさが全面に出ている」

彼の台詞に亮と顔を見合わせると、じわじわと笑いが込み上げ、最後は我慢しきれず爆笑してしまう。

「え? なに? なに? なんかおかしい事言いました?」

「いやさ〜それこそ、今回の新曲、マネージャーと相談して今さっき話した高校時代の出来事が元になっているんですよ」

「ええ? あ、そういえばマネージャーの水沢さんも確かお二人の同級生でしたっけ」

「そう。で、3人で話し合っ、今回のテーマは日本のキレイにしようって」

「日本のキレイ…なるほど」

腕組みをして、うんと彼は頷く。しかし、組んだ手にはめられた腕時計が視界に入ったらしく、慌ててボイスレコーダーの電源を切り、片付けを始めた。

「しまった！！済みません！！時間が押していましたね」

「いえいえ、こっちも楽しかったからつい話しすぎちゃって」

ふと、スマホを見ると、画面には水沢から着信の嵐になっていた。

(うわ、やべ。また怒られるぞ)

「水沢さんにも宜しくお伝え下さい。新曲の発売楽しみにしていますね」

「ありがとうございます、今回の曲で大切な事を教えてくれた地元の人達に恩返しが出来たら良いんですけど」

「へえ、恩返しですか。ああ、なんかそれこそ、日本人の美学って感じですね」

「その言葉、嬉しいですね。そこが音楽でも伝わると良いんですけど」

「うん、きっとあの曲なら伝わると思いますよ。だってね、あの曲聴いた後、なぜか僕、田舎の両親に電話したんですよ。すごく久しぶりに。でね、年末に帰る約束をしたんです。そしたら、みんなで大掃除をしようって言われちゃいましたけどね、ははは」

「いや、良いじゃないですか、家族で大掃除って。そこまでのエピソードが聞けるなんて。めちゃくちゃ嬉しいですね」

すると、黙って聞いていた亮が、俺の肩をポンポンと叩き、拳を突き出してきた。

「やったな、伝わっているじゃん、僕らの気持ち。きっと地元の人にも伝わるよ」

うん、と頷き、俺もこぶしを出すと、満面の笑みでぶつけ合った。